

# 夢風便り

ゆめかぜだより

Volume 9



特集

## ヤング徳川家康 Part:2 戦国ラブストーリー

遠州偉人列伝  
健康教育を貫いた「肝油ドロップ」の父  
河合亀太郎

ザ・サステイナブル・フューチャー  
植林木の活用で「エシカル消費」に貢献

## Contents



- 3 特集  
ヤング徳川家康 Part:2  
戦国ラブストーリー
- 10 遠州偉人列伝  
健康教育を貫いた「肝油ドロップ」の父  
河合亀太郎
- 14 ザ・サステナブル・フューチャー  
植林木の活用で「エシカル消費」に貢献
- 18 輝く未来人  
浜松市出身 米澤奈々香さん
- 20 われら夢風カンパニー  
File: 17 西山病院グループ  
File: 18 株式会社クレストック
- 26 まちの映えスポット  
極上の一期一会で迎えてくれる  
いつ来ても、ここは特別な場所
- 29 ぶらり黒猫の街さんぽ  
磐田駅前・ジュビロード～見付編
- 32 未来に残したい遠州遺産  
浜松元城町東照宮

令和5年6月発行(年2回発行)  
 発行 浜松いわた信用金庫  
 浜松市中区元城町114-1  
 053-401-1812  
<https://hamamatsu-iwata.jp/>  
 編集・制作 株式会社メディアトーク

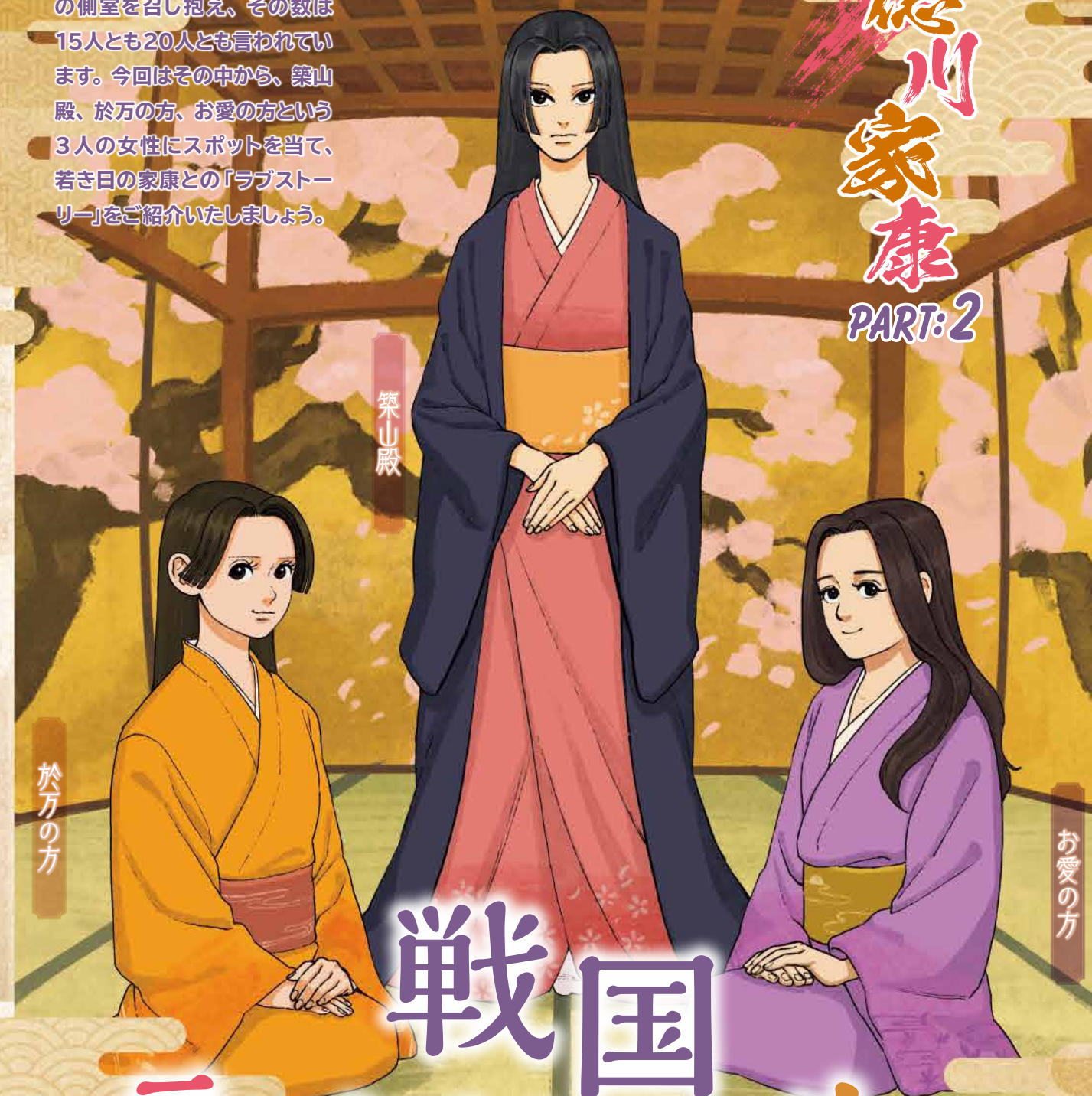
※本記事は、撮影時のみマスクを外しております。ご了承ください。

# ヤング徳川家康

特集

## PART:2

戦国乱世を天下泰平の世に導く偉業を成し遂げ、その一方では多くの女性たちと“恋”に落ちたことでも知られる徳川家康。正室・継室のほかに大勢の側室を召し抱え、その数は15人とも20人とも言われています。今回はその中から、築山殿、於万の方、お愛の方という3人の女性にスポットを当て、若き日の家康との「ラブストーリー」をご紹介します。



# 戦国ラブストーリー

イラスト = 山田アンティ ● 浜松市在住の女性マンガ家。「第96回(2018年下半期)手塚賞」で佳作入選。2019年「ジャンプGIGA」(集英社)にて読切作品「ROUND2」掲載、メジャーデビュー。

# 「初恋の人」との 出会い、 そして悲しい別れ

天文24年(1555年)3月のうらかな初春の日のこと。駿河の太守、今川義元の居館で一人の少年の元服の儀が行われようとしていました。少年の名は松平竹千代。この年で満13歳となる竹千代は、三河岡崎城主、松平広忠の嫡男として生まれました。しかし、わずか4歳で今川氏の人質となり、6歳から義元のお膝元・駿府(現在の静岡市)で育てられます。そう、この竹千代こそは後の徳川家康その人だったのです。

元服では「理髪(髪を整えること)」「加冠(冠をかぶせること。武家の場合は烏帽子)」という儀式が行われます。広間でかしまる竹千代に理髪を施したのは、今川家の縁戚に当たる重臣、関口親永。そして加冠の儀では、太守である義元が直々に竹千代の頭に烏帽子をかぶせたのです。

義元は満面に笑みをたたえ、竹千代にこう言いました。「これでそなたも、わが今川家の立派な武士じゃ。一人前となったからには、竹千代の幼名は改めねばならぬ。余の名前から一字与えるゆえ、本日より松平元信と名乗るがよいぞ」。

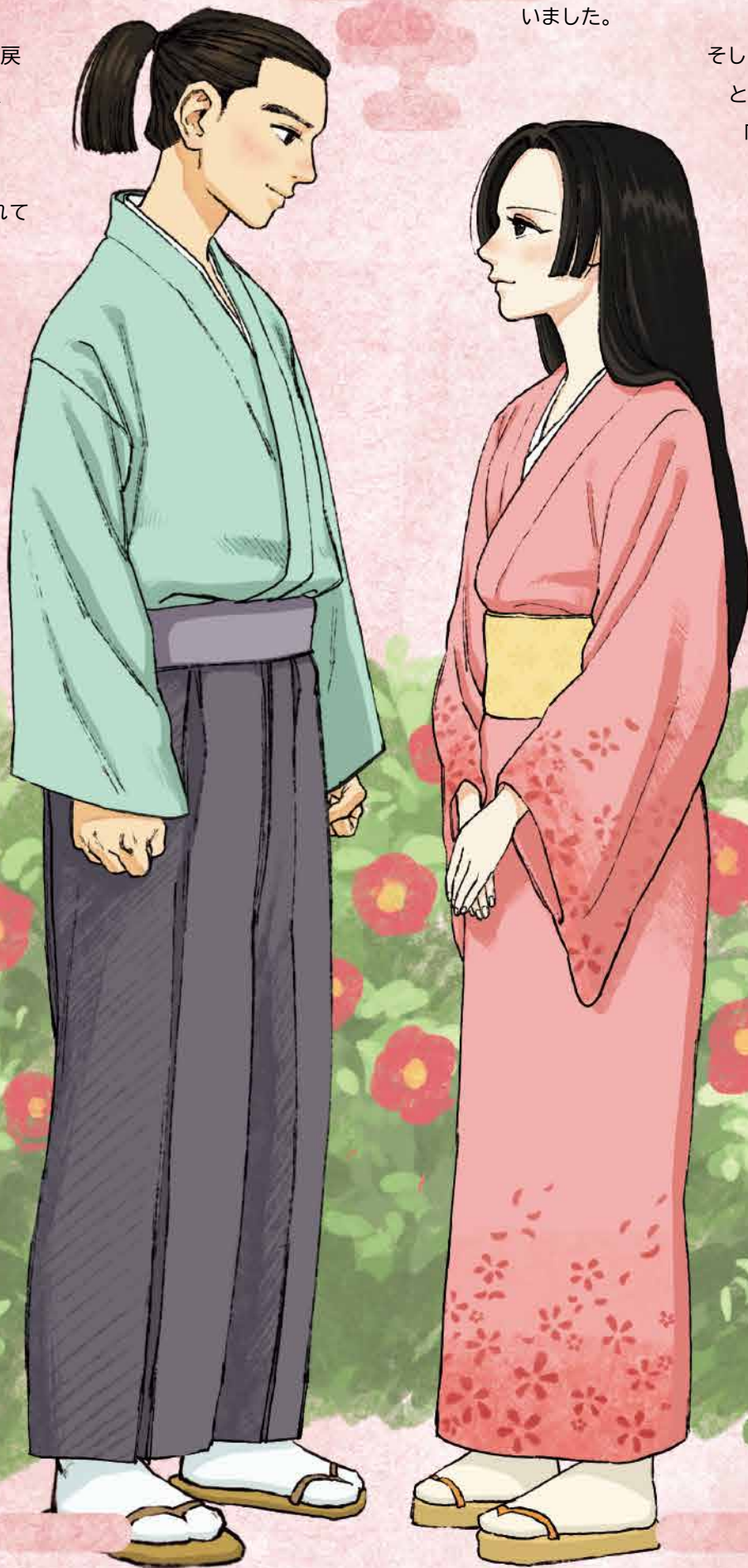
「はは一つ」と平伏する元信を見て、義元はこうも付け加えます。「さて、元服を終えれば…。後は嫁取りじゃ。どこぞに良い娘はおらぬか?」と言って、意味ありげに親永の方を見やります。親永は「はっ、恐れながら当家に瀬名(後の築山殿)という元信殿と同年の娘がおりますれば(瀬名の年齢には諸説あります)、ぜひ、めあわせたく存じます。義元は大いにうなずき、「おお、瀬名か!あれは余の姪で器量が良いし、詩歌の道にも通じておる。ぜひ、そうせい!よいな、元信?」と言

いました。元信は内心、「えっ、あの憧れの瀬名姫と?ホントに?信じられない!」と歓喜しつつ、「ははっ、ありがたき幸せ!」と神妙に平伏したのでした。

儀式を終え、自らの居館に戻った元信はまだ夢見心地で、フラフラと足元もおぼつかない様子。それを見た腹心の石川数正は「殿!何を浮かれておいでですか!今川の姫をめとるといことは、松平が今川に臣従するということだがね!そんなた一け(たわけ)のような振る舞いはたいがいにしなされ!」と、いかつい顔をしかめて諫めます。

元信は数正の三河弁に辟易しながら「いや、これは臣従とかじゃないから。私が瀬名姫と夫婦になれば、田舎領主のわが松平家が太守様と親戚になるんだぞ?これって、すごくない?」。この言葉を聞いた数正は、渋い顔で黙り込みました。

当時の駿府では、「今川文化」という京の都に匹敵するほどの華麗な文化が花開いていました。これは、今川家が京の足利將軍家と親戚筋に当たることから、都の公家や文化人が足しげく駿河を訪れていたためです。公家たちは義元の居館などで盛んに歌会や茶会を開き、そこに瀬名ら今川家ゆかりの女性たちも数多く参加し



ていました。元信は、その時の瀬名の姿を垣間見て、秘かに恋心を抱いていたのです。岡崎生まれの人質とはいえ、6歳から駿府で育った元信は、すっかり「シティーボーイ」になっていました。

そして弘治3年(1557年)、元信と瀬名との婚儀がめでたく執り行われます。「初恋の人」と結ばれた元信は幸せ一杯。瀬名も、太守・義元や両親の祝福に頬を染め、将来の今川傘下の岡崎城主として期待される元信の顔を頼もしげに見上げました。二人の仲は睦まじく、永禄2年(1559年)に嫡子・信康、翌3年に長女・亀姫が誕生。この幸せは永遠に続く二人は固く信じていました。

しかし、元信の家臣の中にはこれを快く思わない者もいて、「この婚姻は今川からの押し付けだ。われら三河衆にとって屈辱以外の何物でもない」と不満を募らせていました。これが後の「築山殿の悲劇」への伏線の一つだったともいえます。

やがて時は流れ一。桶狭間の戦いで今川義元が織田信長に打ち取られたのを機に、元信は岡崎城に入城して今川氏から独立。この後に徳川家康となりました。以降、家康は浜松城主として武田信玄の遠江侵攻を迎え撃ち(三方ヶ原の戦い)、長篠の戦いで信長とともに武田勝頼の軍勢を退けるなど、戦国武将として着実に成長していきます。

一方、瀬名は嫡子・信康とともに岡崎城に入り、築山(観賞用の人工的な小山)のある屋敷に住んだことから築山殿と呼ばれるようになりました。家康は浜松、築山殿は岡崎という離れ離れの生活

でしたが、「殿は西へ東へと軍務にお忙しい。私が岡崎で信康を支えなければ」と築山殿は気丈に振舞います。しかし一方で、「戦に明け暮れ、殿は昔と変わられてしまった。駿府にいた頃の無邪気な笑顔が懐かしい」と、一抹の寂しさを感じていたのも事実でした。

そうした中、天正7年(1579年)7月、ある不穏な出来事が起こります。それは、信康(当時20歳)に嫁いだ信長の長女・徳姫が安土城にいる父宛に、1通の手紙を書いたことでした。手紙の内容は「わが夫、信康は秘かに武田と通じ、織田を滅ぼそうとしている。義母の築山殿もそれに加担している」というもの。一読した信長は「まさか」と思いつつ、たまたま安土城に来ていた家康の家臣、酒井忠次に「手紙に書かれたことは本当か」と問い質します。忠次は否定しませんでした。信長はしばし黙考した後、「ならば是非もない。信康に腹を切らせるよう、家康殿に申し伝えよ」と忠次に命じました。

数日後の夜。浜松に帰城した忠次は、家康に信長からの伝言を報告します。家康は黙ってそれを聞きました。浜松、岡崎の城内で、築山殿と信康の良からめ噂が流れていたことを家康は知っています。けれども「それは真実ではない」と信じていました。「しばらく一人にしてくれ」。家康は忠次を退室させ、長い間、じっと燭台の炎を見続けました。

同年8月、家康は岡崎城に入り、非情な決断を下します。「信康に切腹を命じる」。これを受け、信康は三河の大浜、遠江の堀江城を経て天竜・二俣城に入り、そこで非業の死を遂げました。

そして、築山殿は岡崎から浜松に移送される途中、浜松城まで約2キロの佐鳴湖畔の小藪村(現在の浜松市中区富塚)で、徳川家臣の手にかかり命の花を散らします。波乱に満ちた37年間の生涯でした。

果たして、築山殿や信康が本当に家康を裏切ろうとしたのか、真相は今も謎のままです。ただ、当時の徳川家中には織田派、反織田派(武田派)の対立があり、両派の抗争に二人が巻き込まれた可能性が高いと考えられます。また、家臣団にとって築山殿は「しよせん、今川の娘」であり、駿河時代のわだかまりは未だ尾を引いていました。

いずれにせよ、家康は断腸の思いで、長年連れ添った正室と嫡子の処分を決めました。織田との同盟関係は徳川にとって死活的に重要であり、いったん築山殿と信康の謀反の噂が信長の耳に入ったからには「これ以上、事態を放置できない」と家康は判断したのです。

「赦せ、瀬名、信康…。一人、居室で肩を震わせる家康の脳裏には、若き日の幸福な思い出が走馬灯のように蘇っていました。

# 家康への 一途な愛に、 鬼の目にも涙

さて、築山殿の悲劇から少し時を巻き戻した天正2年(1574年)1月頃のこと。夜更けの浜松城内を一人の大男が手に灯火を持ち、熊のように体をゆさゆさと揺らしながら見回りに歩いていました。暗闇に浮かぶ男の顔は灯りを受けて真っ赤に染まり、まるで赤鬼のよう。なおかつ、刀傷で潰れた片目がその容貌をますます恐ろしげなものにしています。

「今宵も城内に異常はないな。わしもそろそろ寝るとするか。そうつぶやいた男の耳に、どこからともなく「しくしく」という女のすすり泣く声が聞こえてきました。「はて面妖な。不審に思った男が辺りに聞き耳を立てると、その声は少し離れた納戸から漏れ出ています。男は納戸の前まで行き、戸をがらりと開けて「おのれ何やつ！」と一喝しました。

「ひっ！」と悲鳴を漏らしたのは、一人のうら若い侍女。よく見ると、そのお腹は大きく膨らんでいました。「鬼！鬼が出た！食べないで！」と侍女は叫び、へたり込んだまま後ずさりします。男は「落ち着け！わしは鬼ではない。奉行の本多作左衛門という者じゃ。もっとも、あだ名は『鬼作左』じゃがの…」と言って侍女をなだめました。「それよりも、その方は誰じゃ？こんな夜中に、一体どうしたのだ？」

侍女の名前は於万。もともとは岡崎城で築山殿に仕えていましたが、つい先頃、浜松に移されました。作左衛門は於万に問います。「見たところ身重のようじゃが、腹の子は誰の子じゃ？」。於万は恥ずかしそうに身をよじりながら「あの、それは…」と言い淀みます。「いいから言うてみよ」と詰め寄る作

左衛門に、「実は…。大殿様(家康)のお子なのです」と於万。「なあ～にい～!?大殿、やっちゃったな！」と、作左衛門は天を仰ぎました。「こりゃあ、一大事だがね」。

「で、このことをご正室様(築山殿)は?」「はい、知っておられます。でも『於万は正式な側室ではなく、侍女であろう。侍女の産む子を大殿様のお子とは認められません』と言って、私を追放されたのです」「うーむ、物事の筋道を通すご正室様のおっしゃりそうなことじゃが…。それで、そなたはどうし



作左衛門様。  
 あなたは「鬼作左」ではなく、  
 本当は「仏の作左」ですね。  
 感謝しております。

わしは仏などではなく、  
 鬼でござるよ。  
 (それにしても、無事に生まれて  
 本当に良かった)

たい?」「産みます！私は大殿様を愛しているんです！愛するお方の子を産み、大切に育てたいんです！」

翌朝、作左衛門は家康に声を掛けます。「うん？作左か。どうした、朝っぱらからそんな怖い顔をして」。作左衛門は「怖い顔は元からでござる」と言いつつ、昨夜の出来事を家康に伝えました。これを聞いた家康は「むむ、そんなことがあったか。そう言えば最近、岡崎から『築山殿が於万を木に逆さ吊り

して折檻した』於万を亡き者にするため、浜松に刺客を送った』などという変な噂が流れてきた。瀬名がそんなことするはずなのにね。しかし、このままにはしておけないな。どうする、作左?」。作左衛門は「どうするも、こうするも」と洗面を作りながら、「ひとまず、それがしに考えがございますれば」。家康は「頼んだぞ」と作左衛門の肩を叩きました。

この難題の解決を家康に託された作左衛門とは、どのような人物だったのでしょうか?「鬼作左」の異名の通り戦場で

無類の強さを発揮しましたが、彼の真骨頂は奉行としての優れた行政手腕にあります。領内の民百姓への非道なことや依怙鼻頂をせず、もめ事への裁きは常に明快で迅速。また、三方ヶ原の合戦前にはいち早く兵糧を確保し、家康を喜ばせます。この功績で、作左衛門は城内の一角に屋敷を建てることを家康から許され、その場所は後に「作左曲輪」と呼ばれました。現在の浜松城にも、この曲輪の跡は残っています。

そんな作左衛門がひねり出した秘策。それは、宇布見村(現在の浜松市西区雄踏町宇布見)に住む旧知の代官、中村源左衛門の屋敷に於万を預けることでした。作左衛門は「何も心配いらないから、元気なお子を生んでくれ」と言って、於万を安心させます。やがて同年2月、於万は何と、双子の男の子を出産。このことを作左衛門から聞いた家康は「そうか、それはめでたい。しかし、正室の瀬名が認めない以上、私が認知するわけにはいかんだよ(当時、そういうしきたりがあったようです)。まして双子とはねえ…。仕方ない、一人はしかるべきところへ養子に出すとして、もう一人は引き続き中村家に預かってもらおう。ほとぼりが冷めたら必ず認知すると、於万にはそう伝えておいてくれ」。

家康の言葉を作左衛門から聞き、於万は「わかりました。私は大殿様を信じます」と言って、胸に抱いた二人の赤子に優しく微笑みかけました。そして「こうして無事にお子を生めたのは作左衛門様のお陰です。あなたは鬼作左ではなく、本当は『仏の作左』ですね。作左衛門は「わしは仏などという柄ではない。鬼でござるよ」と照れながら、武骨な指でそっと目頭をぬぐったのでした。

その3年後、家康は於万の産んだ一子と正式に面会し、子を「於義丸」と命名しました。そこからさらに2年後に築山殿が死去してから、5歳になった於義丸はようやく家康に次男として認知されます。そして、その母も正式な側室「於万の方」となったのです。

ただ、於義丸が家康の後を継いで将軍になることはありませんでした。10歳の時、於義丸は羽柴(後の豊臣)秀吉の養子となり、羽柴秀康と名付けられます。さらに16歳となった秀康は、秀吉により北関東の大名・結城家へ婿養子に出され、結城秀康となりました。関ヶ原の合戦以降、秀康は徳川傘下の武将となり、実父・家康の天下統一に貢献。その後、越前国(現在の福井県)に移封され、初代福井藩主、越前松平家の祖となっています。慶長12年(1607年)、33歳で病により死去。一方、於万の方は秀康に終生付き従い、元和元年(1615年)、越前国で72年の生涯を閉じました。

余談ですが、秀康と於万の方を助けた本多作左衛門は、日本一短い手紙として有名な「一筆啓上 火の用心 お仙泣かすな 馬肥やせ」の作者でもあります。これは長篠の戦いの陣中から妻宛に出されたものとされ、文中の「お仙」は当時幼かった嫡子・仙千代のこと。慌ただしい戦場から、武人らしい飾り気のない言葉で必要最小限のことを書き送った手紙ですが、その行間から妻子への深い愛情がにじみ出ています。鬼の異名を取りながら、実は優しさと人情味があった作左衛門らしい文面といえるでしょう。

# 奥様はスパイ？ それとも 心優しい慈愛の人？

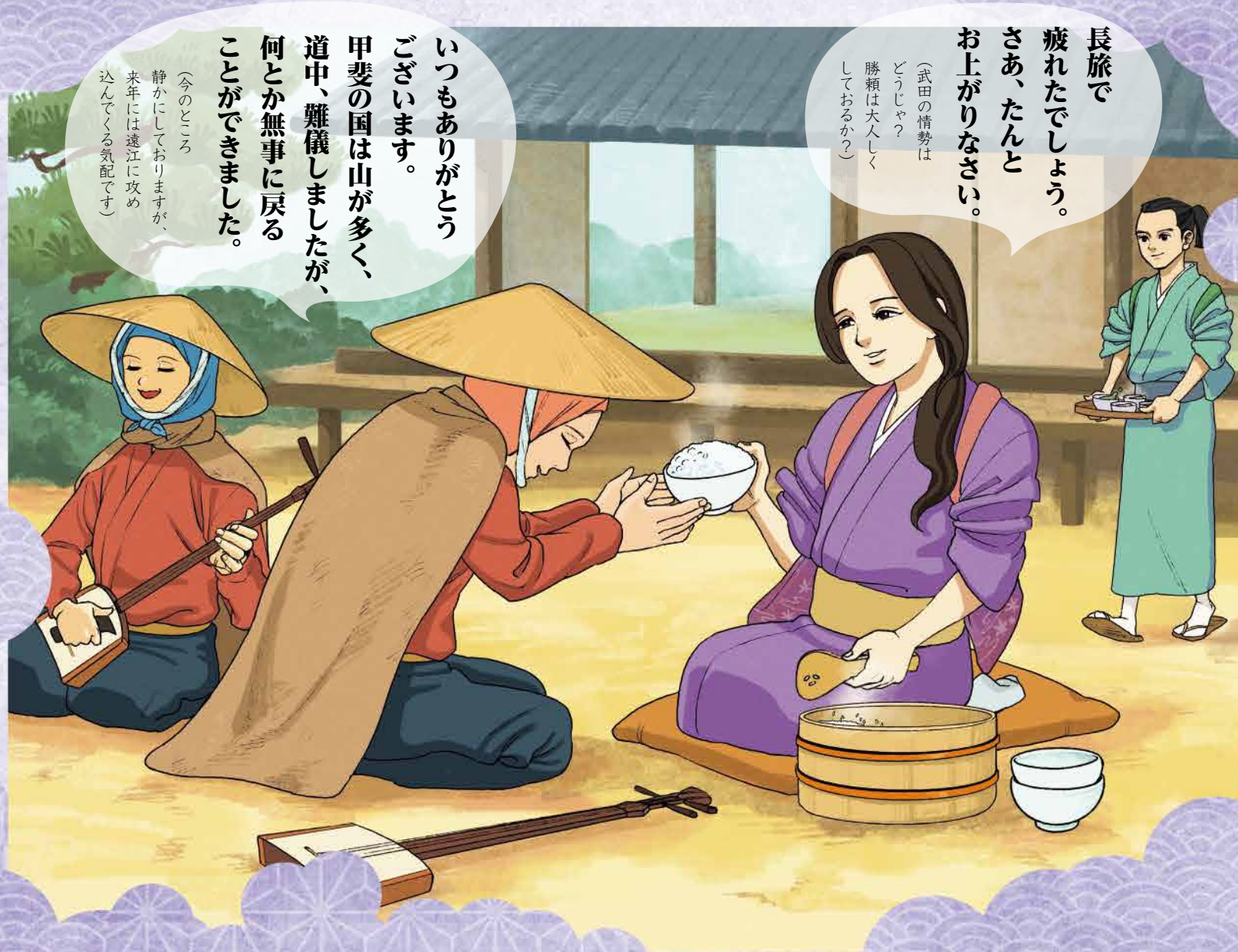
タタタタタター。廊下の向こう側からこちらへ、誰かが急ぎ足で近づいてきます。「大変大変！遅刻遅刻！」。そんなことを呟いている足音の主は「今日は父上の大切なお客様がお見えになる日！もう、お屋敷に到着されているはずだわ。早くご挨拶に上がらなきゃ…」と焦り気味です。そして、廊下の曲がり角に差し掛かった瞬間、反対側から角を曲がってきた男性とドーン！正面からぶつかり、二人は同時に尻餅をついてしまいました。

「あいたた…。あっ、誠に申し訳ございません！急いでおりまして、ついご無礼を。お怪我はございませんか？それでは失礼します！」。そう早口で言いながら、再びダッシュで走り出した後ろ姿に向かって、男性は「あ、私は大丈夫だ。それより、そちらこそ怪我はないか？そんなに急ぐと、またぶつかるぞ〜。と言ってる間に、もう行っちゃった。何ともせわしない女だ。だけど、すごい美人だったなあ…」。

場面は変わって、ここは同じ屋敷内の客間。先ほどの廊下の男性が上座に座り、この家の主である西郷清員という初老の武士が男性に平伏しています。「本日は殿おんみずからわが屋敷までお越しいただき、恐悦至極に存じます」。これに対し男性は「よいよい。その方には、この家康、いつも助けられておるぞ」と答えます。もうおわかりかと思いますが、この男性は徳川家康。所用があって、清員の屋敷を訪ねていまし

た。しばらく清員と歓談した後、家康は「ところで」と切り出します。「廊下で出会った麗しい女人は誰だ？」。

「ああ、あれはそれがしの養女とお愛と申します。掛川の生まれで、もともとわが甥である西郷義勝の妻だったのですが、義勝が武田との戦いで討ち死にしましてな。その後、当家に引き取ったという次第です」なるほど。で、どのような人柄だ？「少々慌て者ですが、読書家で博識、心根は優しいでございます。ただ極度の近眼のため前が見えにくく、よく人と



いつもありがとうございます。  
（武田の情勢はどうじゃ？  
勝頼は大人しくしておるか？）

（今のところ、静かにしておりますが、来年には遠江に攻め込んでくる気配です）

甲斐の国は山が多く、道中、難儀しましたが、何とか無事に戻ることができました。

長旅で  
疲れたでしょう。  
さあ、たんと  
お上がりなさい。

ぶつかります。「ははっ（笑）、それはようわかる」

「さらに…」と清員は声を潜めて言いました。「これはここだけの話ですが、お愛は義勝に嫁ぐまで、伊賀忍者の一族である服部平太夫という者に養育されました。お愛は平太夫に間諜（スパイ）の技を仕込まれておりましてな。日頃から、瞽女という盲目の女旅芸人の集団を諸国に派遣し、情報収集に当たらせておるのです」。これを聞いて、家康は思いました。

「平太夫、忍者。お愛、スパイ。家康、ワクワク！」。

しばらくして、「失礼いたします」と襖を開けたのは当のお愛。静々と家康の前に進み出ますが、畳のへりにつま先を引っ掛け、前につんのめってしまいます。すると、お愛の体は空中を華麗にダイブし、家康の頭上へ。そのまま家康を仰向けに押し倒しますが、両手を畳につき、辛うじて顔と顔の正面衝突は避けました。

しかし、これは「壁ドン」の垂直バージョンといえる「床ド

ン」。しかも、捻破りの「男女逆床ドン」です。二人の顔と顔の距離は、わずか10センチほど。数秒後、我に返ったお愛の頭の中は「えっ、この方はさっき廊下でぶつかった方？なんでここにいの？はっ！ひょっとして家康様!？」と大混乱です。そして、ものすごい勢いで後ろへ飛び退き、「誠にご無礼いたしました!!ひらにご容赦を!!」と平伏しました。

家康は起き上がり、「慌て者め。気を付けよ」とクールに叱

りましたが、内心は「むしろ、うれしい。息がかかるほど、傍にいてほしい」と、ニヤニヤが止まりません。これをきっかけに、お愛は家康の側室「お愛の方」となったのでした。

家康に召され、浜松城に入ったお愛の方は、その気さくで優しい人柄と持ち前の頭の良さで、城内の家臣や侍女から絶大な人気を集めます。強面の石川数正も、切れ者の酒井忠次も、剛勇無双の本多平八郎も、みんなお愛の方の大ファンになりました。「あのお方のためなら、死ぬる」。一方、「ドジっ子」ぶりは相変わらずで、部屋にあったタヌキの置物を家康と見間違えることがあったとか、なかったとか…。

また、お愛の方は領内の庶民たちを深く慈しみました。とくに目の不自由な女性たちのことを気かけ、日頃から食事や衣服を与えていたといひます。そうした盲目の女性たちの中に、先ほど西郷清員が言っていた瞽女の集団もいました。瞽女は三味線片手に全国各地を渡り歩き、聴衆の前で弾き語りをして生計を立てています。彼女たちは旅芸人として全国どこにでも行くことができ、目が見えないため人に警戒されることがありません。しかし、日常の何気ない会話から重要な情報を聞き取る優秀な「耳」を持っていたのです。

例えば、お愛の方は瞽女たちに「たんとお上がり」と食事を与えながら、常人には聞こえない「忍びの声」で（武田の情勢はどうじゃ？）と尋ねます。すると瞽女も同様に（今のところ大人しくしております）と答えるという、機密情報のやりとりをしました。もちろん、得られた情報は逐一、家康に報告され、徳川の軍事・外交に役立てられたのです。

また、お愛の方は家康にとって「妻」としてもかけがえのない存在でした。天正7年（1579年）、お愛の方は家康の三男・長丸、後の二代将軍・秀忠を産みます。翌8年には四男・福松丸、後の尾張清洲藩主・松平忠吉を出産。お世継ぎの母であり、家臣や領民にとっては慈悲深い菩薩のような人であり、また「スパイ」として家康を陰で支えたお愛の方は、多面的な魅力を持つスーパーウーマンだったといえるでしょう。

天正14年（1586年）、遠江、駿河、三河、甲斐、信濃の5カ国の領主となっていた家康は、居城を浜松から駿府に移します。これに従ってお愛の方も駿府城に入り、浜松在城時と同様、公私とも忙しい日々を送りました。しかし、そのわずか3年後の天正17年（1589年）、お愛の方は37歳の若さで花の生涯を閉じます。最愛の人を亡くし、家康は悲嘆に暮れましたが、それと同じくらい悲しんだのは名もない庶民たちでした。お愛の方が葬られた寺へは毎日のように人々が弔いに訪れ、恩人の冥福を祈ったといわれています。

※この特集の描写は、史実を元に「マンガ」として大胆なアレンジを加えたものです。